

松島圖誌

松島圖誌

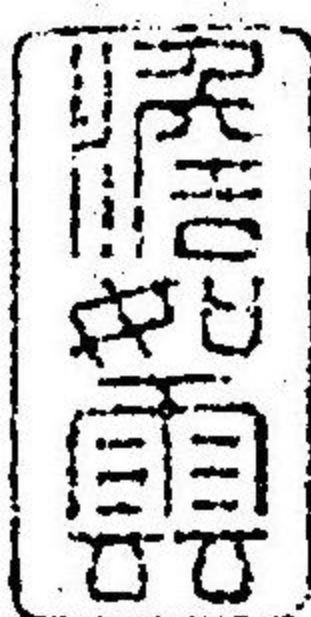
贈後二位子爵鐵舟山岡公題辭
仙臺宿儒鼓缶子櫻田先生
仙臺東澤先生圖著

仙臺 裳華房藏



223954





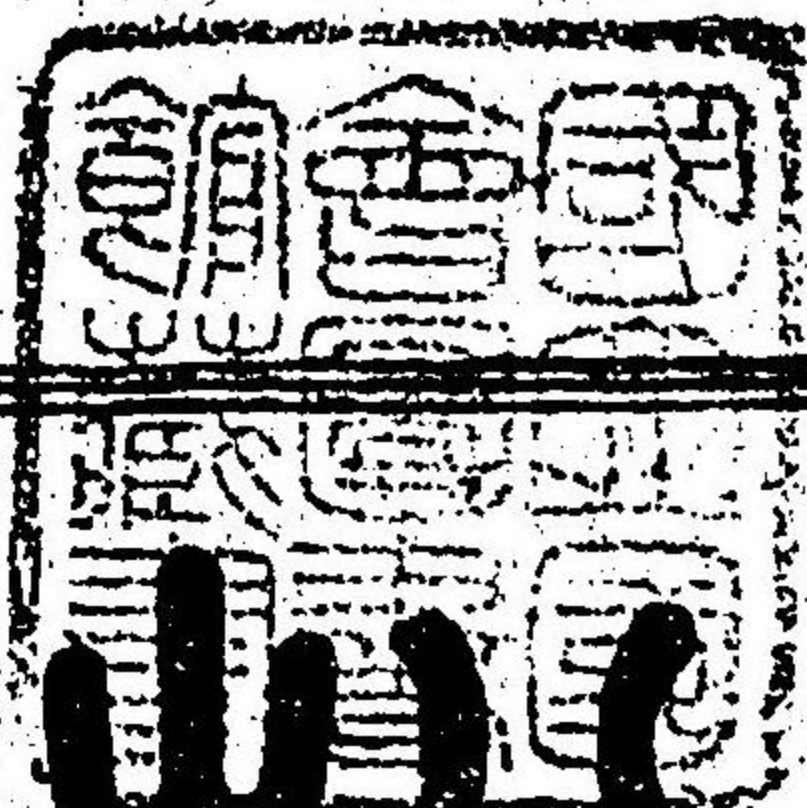
行 道
馬 國

行 道 馬 國

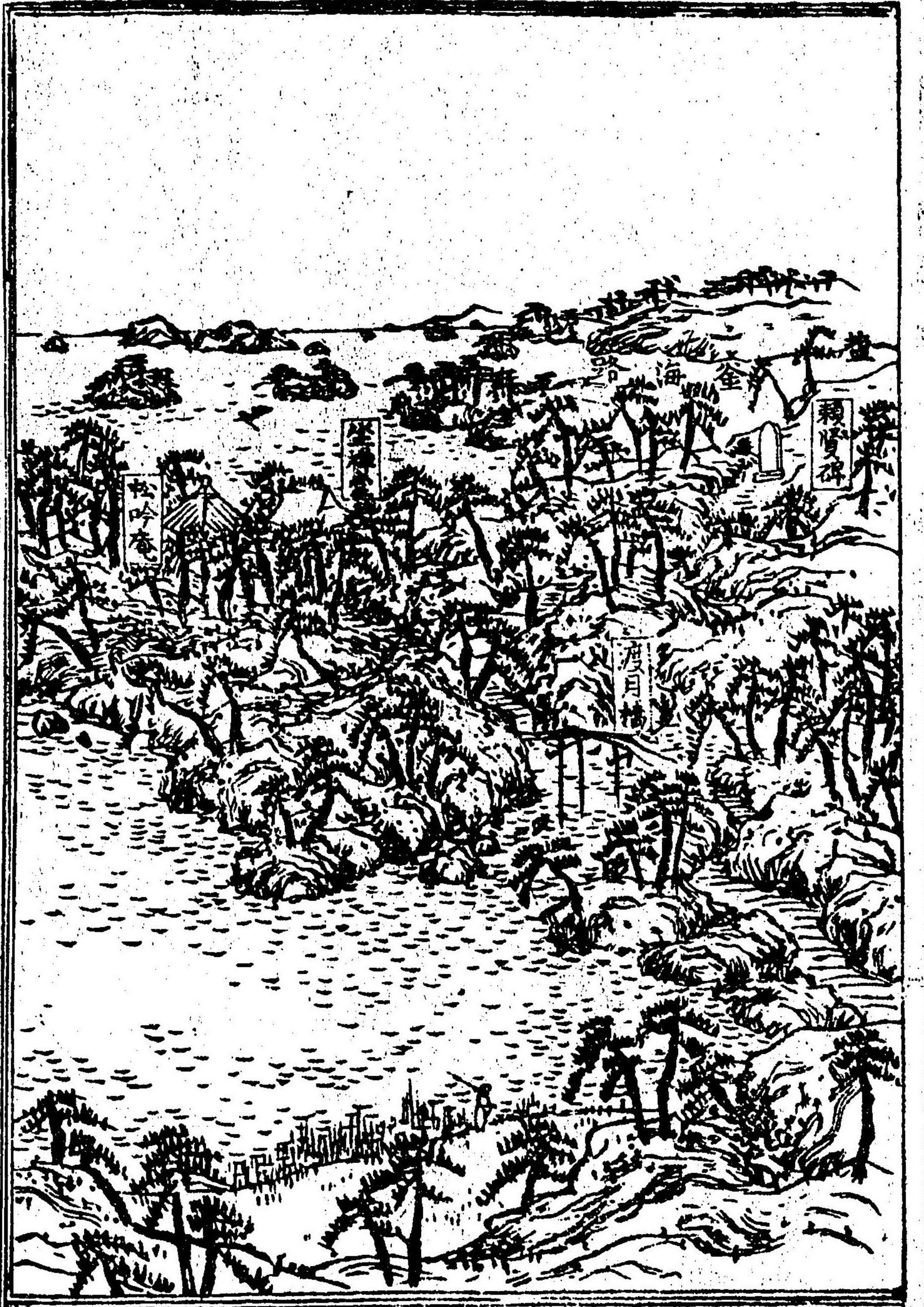
永達圖詩

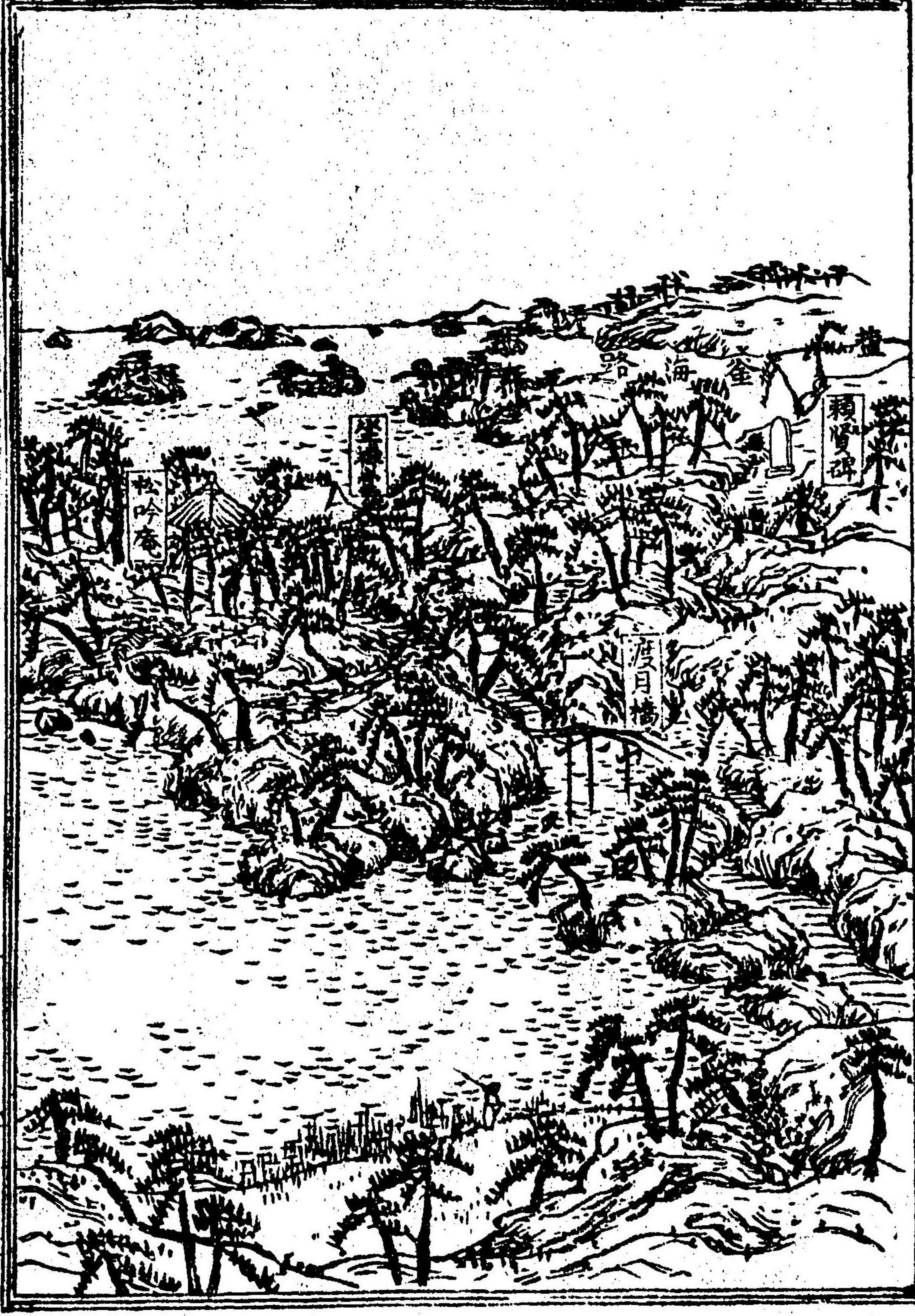
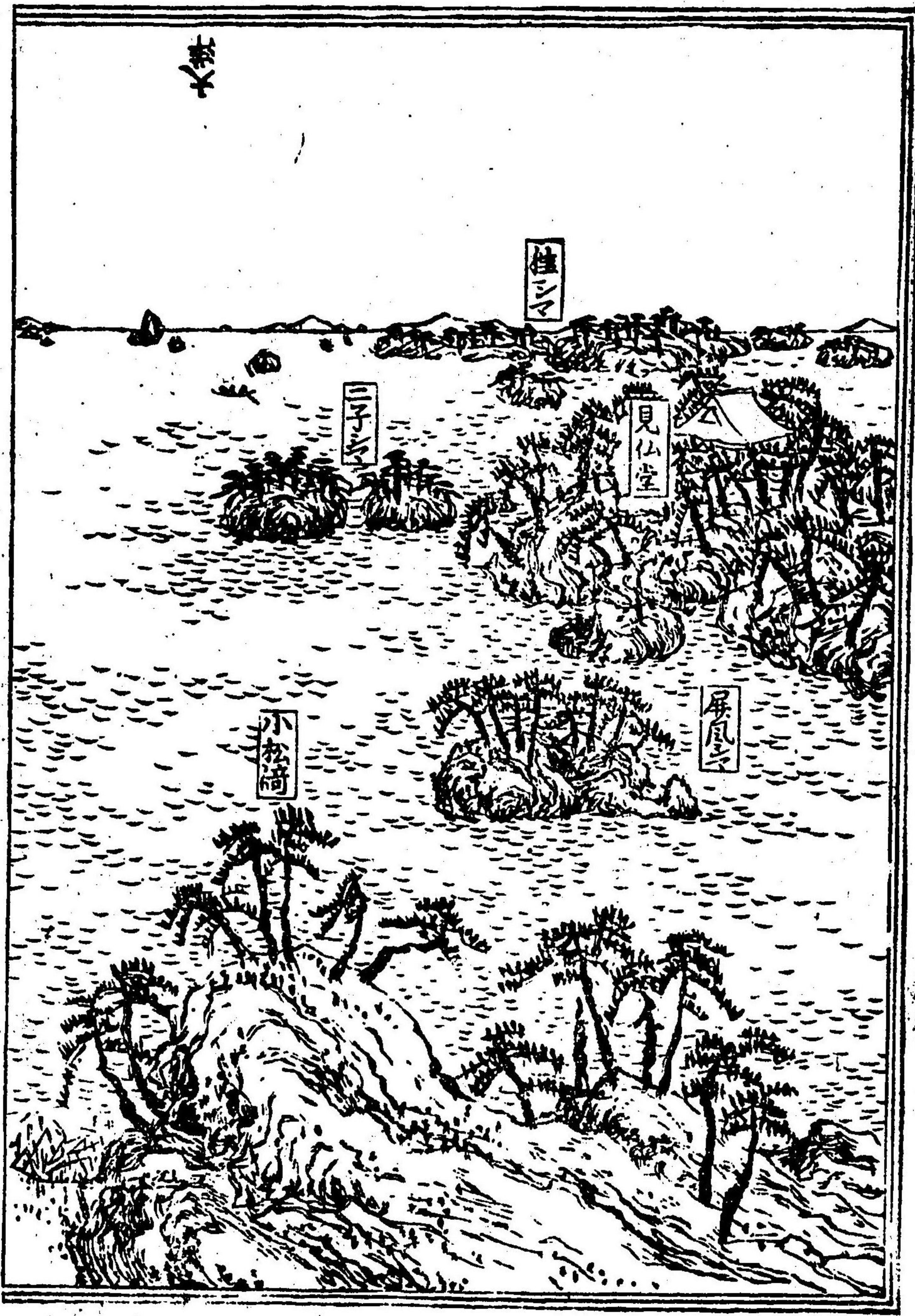
永達圖詩

永達圖詩

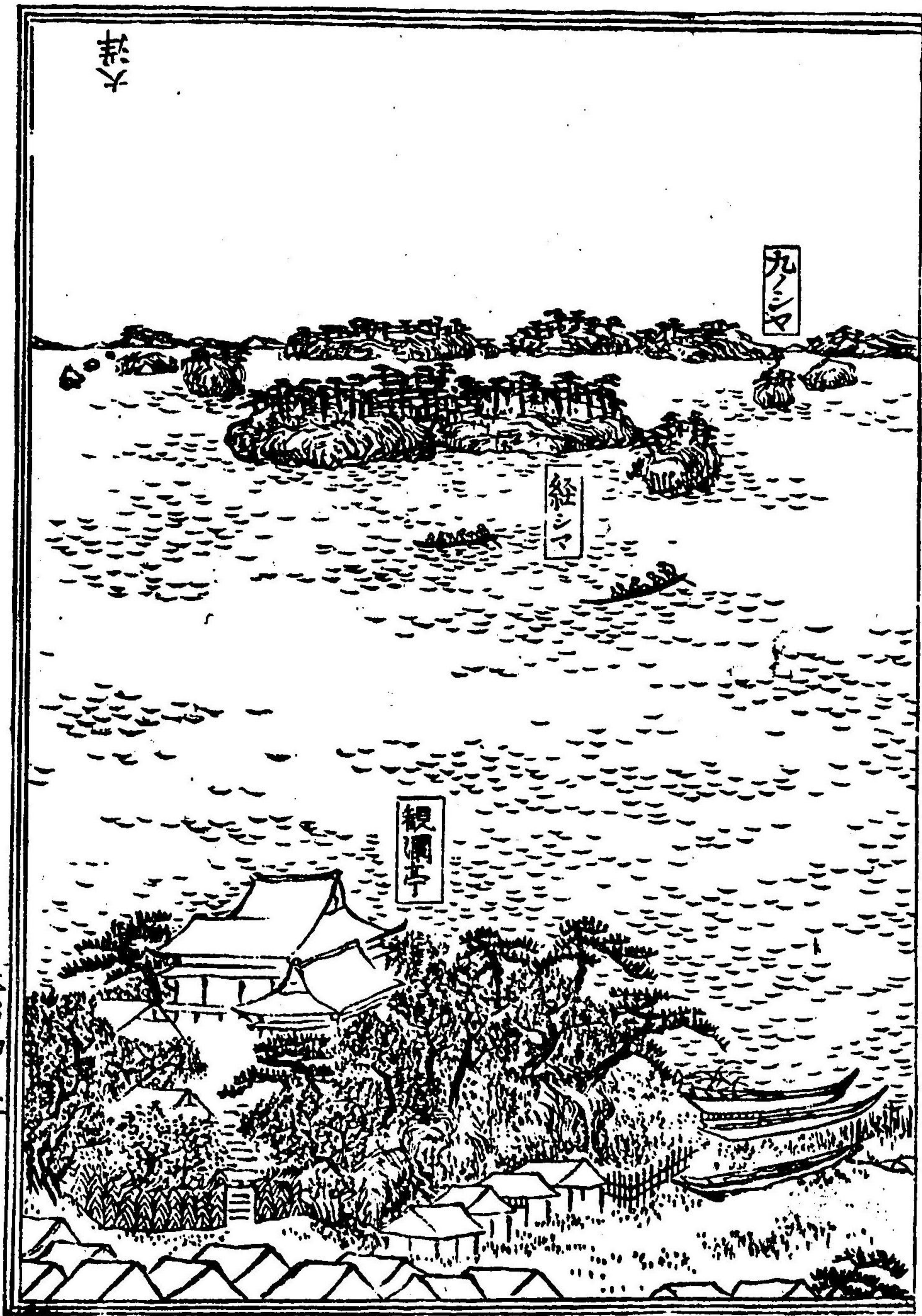
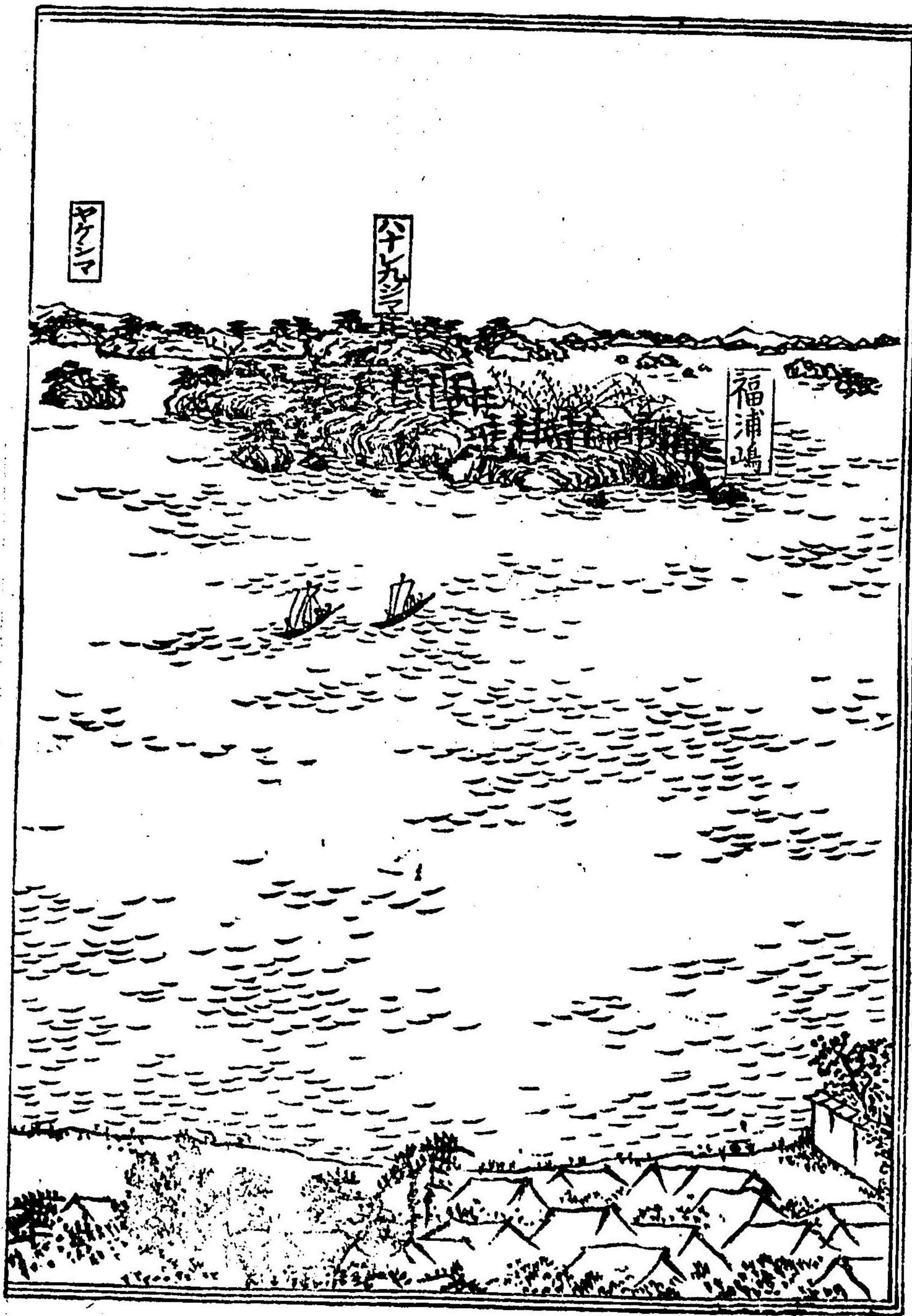


永達圖詩

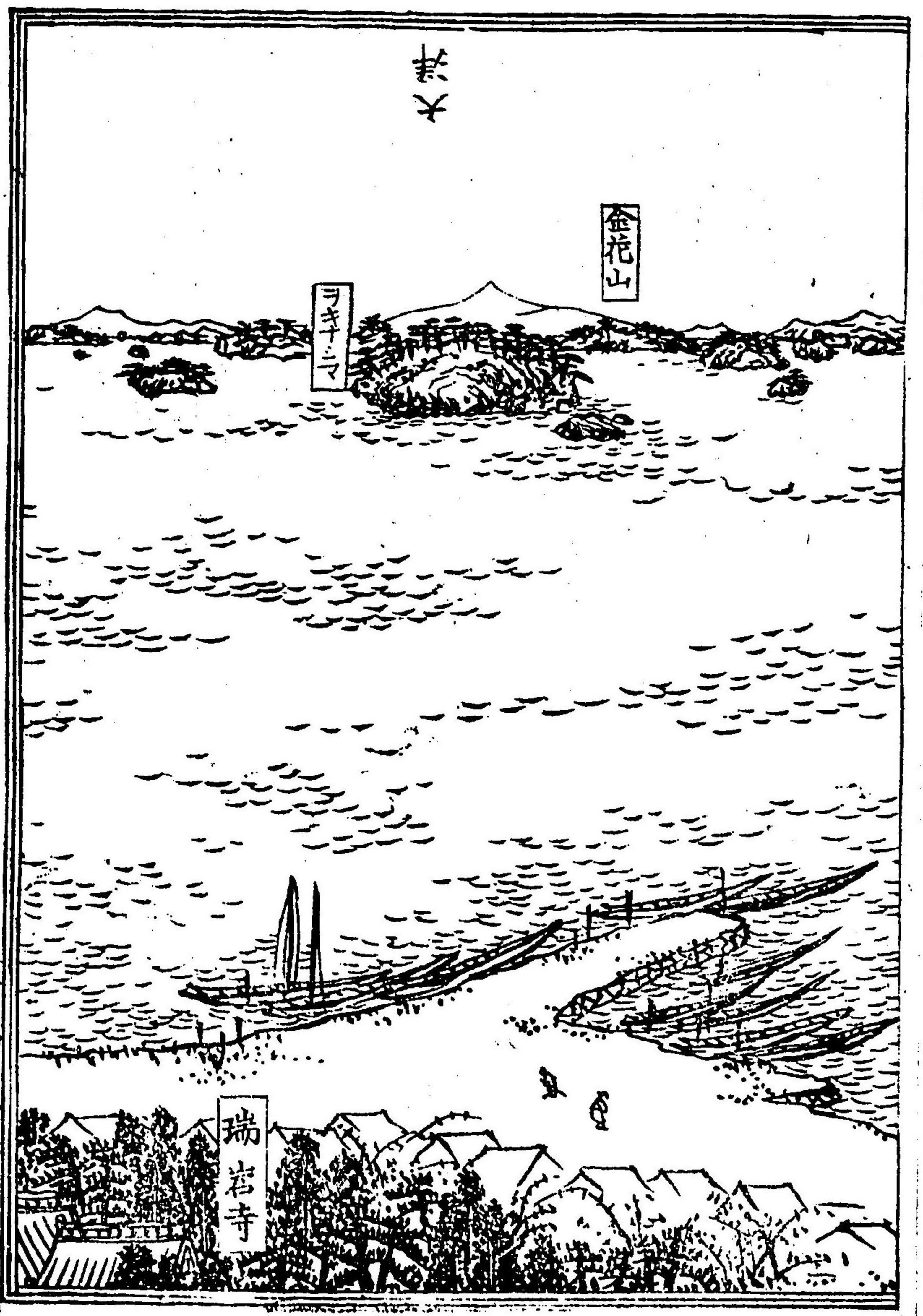
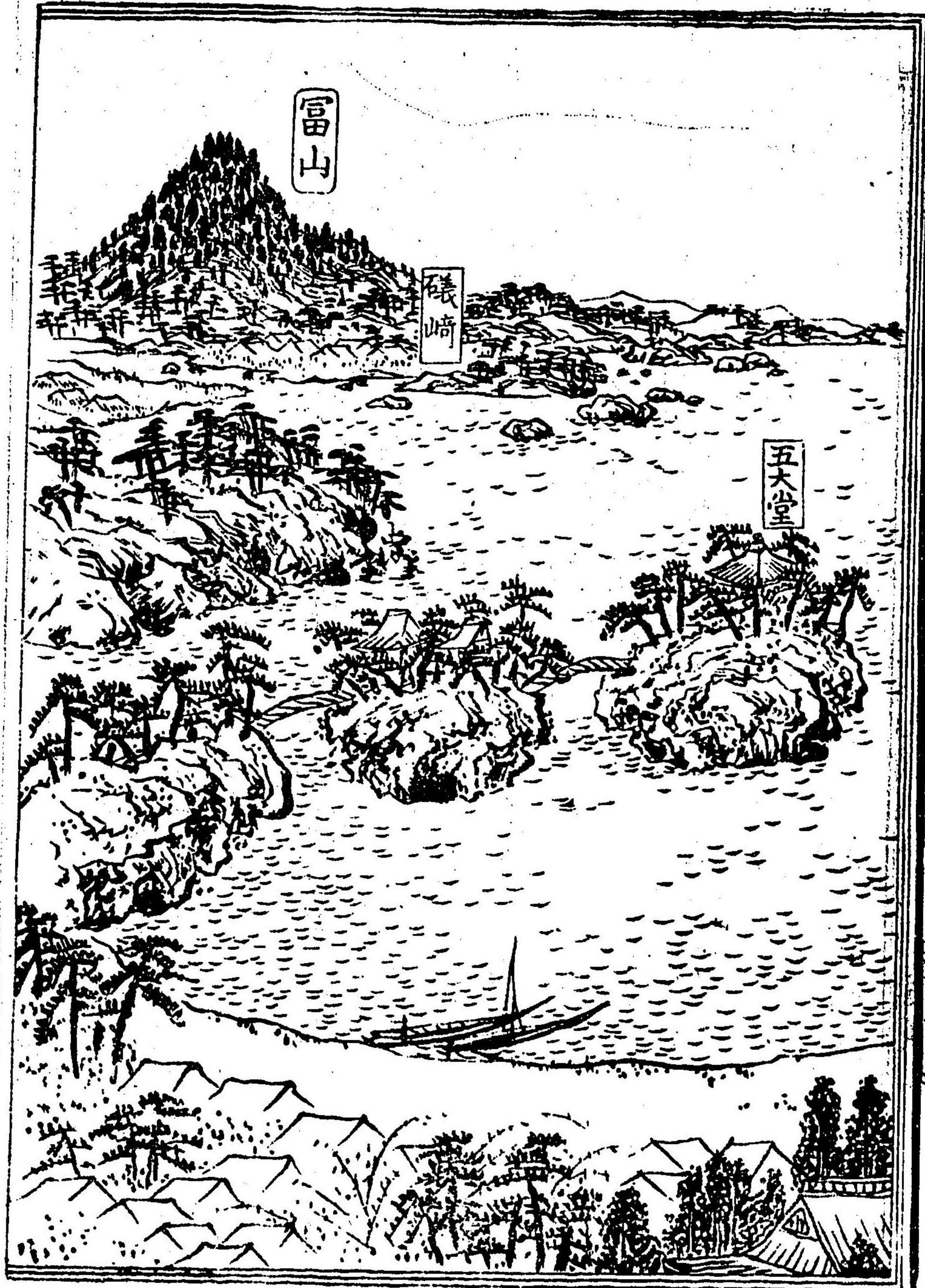




大木



大津



大津

松嶋圖誌

抑名に於ふ松嶋ハ陸奥州宮城郡松嶋村にあり安藝云
州嚴島丹後州天橋立とおちつひて日本の三景と称
を中よも天成の奇絶四時不随くさほくに晨夕可
うつりかたてて極あるりなく區域廣大く七日を經て
詠めあつたる事々誠に其の松島哉天下無雙とす也
古人も云り極松嶋と名はけしり事
鳥羽院の時時文治年中見佛上人は地は位一むいこと
勅願にまうりて大内藏康光卿を勅使として此丸ふ
ひめ松千株をくゑさせしめてより其頃千松嶋と称せし

とらや後々略して松嶋とよぶ古歌も松嶋といひり
今ある松ハ千株万株の数をとるべしとていふも同村
此内阿弥陀山といふ丸は勅使松とよぶもの二株有り
一株も圍八尺餘一株ハ圍九尺余ありこれ即古くもせ
たすふ松ありといふ此文政の頃より凡六百九十餘年の
星霜を經るといへども弥茂り榮て緑の色殊に深し
按ずるに松嶋の名ハ文治より以前ハ和歌にも見ゆこれハ
は時よりばまうもあつたるべし或も松島の名ある
よもてく子株の松をも裁はせぬはや志るるなりと云
一説或人乃案内記に達磨大師この松嶋よと云る

多ひ大澤松考の南にありといふ処に表らせり大城聖徳太子待

たまひに待嶋といふや以説ふ據る時を待の字を用

ふべし鳥羽帝の時時より五六百年もあつる

也されども信ずるにたゞの又案内記に見佛上人法嶋

よて日々法華を讀誦志す大鎌倉の二位乃禪尼夢

みひて天竺の佛舍利二粒姫子松千本に法文をそへて

贈りしよふも松考といふとさきにも禪倉の時よりあ

に松嶋の名ありり古きもの出れば是亦信ずるにたゞ

松嶋といふも總名にして其内小敷多の勝地靈跡あり世

八百八島ありまむゆや大小の嶋々数多をいふあり

今まれをかぞふるに松嶋村は属して各ある嶋三十五

あり五大堂の島二つ并基ちひさた嶋哉合せりくをある時を四十にもははまり其餘他村に属し

て松嶋乃海面小くなり眺望に入る島を數十は

あまきりみな海面におたもひて碁楯に石をもと

しるがぬくひづきも争て奇状を呈し中にも古より

名高たを雄嶋なり名なき小嶋は数も多るを

其考何れも天造の自然にやてあより見ると後より

詠むるとさぬく乃形城なり棹をすめ柱をめぐり

に随く千態萬狀かぞへ尽し難たが左に里人といふ

どもあはれくそ名をたゞるもありけり其見も

窠をよめていたが八百八よりふもおろつたるべし狸俗乃
日本武官の言とく八百八の雲のかげくうちながめ都の津く
よつとくくとりよに扱まは八百八とりよも古きものなりなきともは
赤上代此人乃よき〇凡東海も何きの雲も浪あはれ浪
はげしくしく日和よく風静なる時も浪声耳に喧し
たぐは松嶋も休表に数十の洲嶼をさへへるおと絶て
浪なく休面平にして鏡の如く碧碌澄徹して面をうつ
し見るへしそ中も数十乃崎くあはれく譬へ三千の
宮女粧を凝して宮房に列するかめく画も及たざるふ也
〇此崑松をもく名はけて殊に松樹多しその松根を
巖石によせ枝幹も休凡も撓めまろく屈曲偃蹇しつる

さぬ臥すぐめく倒るゝか如く其休面に俯しつるも
龍蛇の水に入ると疑ふやゆま筆れ及ぶべきにあ
ず〇凡何國乃休辺も地よつきたる処ハ沙汀斤園
とありく清潔形も流は雲木小め嶋くこな断岸と
なきて多くハ下狭く上廣くして崩きんとける形乃
如く或も樹根をあはり或ハ奇石を出以るまどに
こな如此たりの〇は一村もな瑞岩寺の所領にしてすべ
く殺生伐禁まるゆえ鳥鷗の類も人よなれて驚うま
又大魚岬に近づた激を蹴り躍り出るるあり夜も
入てそ音をきく時も殊更幽静れ款を助く〇此地

風景の羨なる事春夏秋冬をこころび又晝夜昏且を
るぶてびこき遊人のある所なり中にも見るなほき
雪此朝な里見なきし里人を目我驚しし思ひも
身をうちく叫むんとす謀に人間はあるべし境界に非
まじいふ○毎年七月十六日乃夜大施餓鬼とく海上
百八の燈籠を流し遠近群聚してそをえる其光海を
涵し天我照しし数々の時く燈火の流るに随て或ハ
あらしき或もかくるさぬたふべし詞なり

○長老坂 仙臺城下より松嶋に入る道に三丁餘の坂有
はまのりなりめく松嶋の海面をえる昔瑞岩寺臨濟

関山法心上人松嶋へ下りたまふ時は衣をぬぎまき
を長老坂と名づくといふは圃の番僧の初に僧位何なる
まをいひて長老とす

按ぶるに今眺浪の字を用ふは所法上院眺望は
ゆえに名づくといふも好事の文士附會するなるべし或を
坂長く疲労しし身老るかに長老と名づくとも附會乃
説なり

○西行もごとく松 長老坂の傍れ山上にあり俚俗の説ふ
所行も 鳥羽院の北面乃士なり密に宮女み通せしが
そ女度うさなきはあはれと云ふに西行其詞を解せば
僧とちり諸國を巡りて爰に至る乃の傍れ松れ下は牛に草

うへ公羽ありてそ牛飽ざるをあこがれありしを罵りみせし
所ゆゑに成せり公羽は同じに伊勢の浦阿漕がうらに
ひく綱も度々なまきばあはれとすといふ言を以て答ふ
西行耻くは空よりぬまり依て西行もどくは松を以て
翁を即松嶋の明神を以てとす

一説に西行松嶋を来る路の入口よて童子の牛をひく
よあて和歌をよめりける月にそふ桂男は通ひ来て
すいたちをむと誰子あつらん童子ききて雨をふり
震ゆかり夢もぬりくばらむさくさくたが子あつらん
とよみくくは西行大に耻く側なる樹を手おさるべと

して帰るぬ今その様はかきく松の大木ありそ童子
を松嶋の鎮守山王持現乃化身也と云
松嶋の鎮守山王持現乃化身也と云
はもかきくくを
るくたが老石
の形に似たり

○山王社 松嶋村の鎮守也 淳和天皇乃清時慈覺大
師江島坂本に山王を以てぬに勸請しぬふ初と五大堂
天童菴の側にありし成寛永十九年の庚雲居和尚
々乃雲に移せりと云毎年四月中申乃日申の刻糸或有
○観音堂 木像の観音恵心僧都の作毎年四月十八日
糸或有

○天麟院 瑞岩方の南横町といふ所乃裏にあり

先太守貞山公の侍姫にて徳川氏越後少將忠輝
朝臣の夫人となりぬし一が忠輝朝臣ありて飛弾列
に諱せりまゐひ一後夫人を仙臺にぬり落飾し西館
としふまゝに住むひ老後けれは移りて六十八歳にて終り
給ふを爰に葬て此寺成立はとぞ

○圓通院 瑞岩寺の西南生薑浦といふと云ふは有

先太守義山公の侍嫡子越前守光宗公十九歳にて早
世しぬふを爰に葬りて此寺を立はとぞ

○瑞岩寺 吉龍山瑞巖圓福寺と称し山城花園ゆふ
の末流にて臨濟宗也凡松峯にある所の古寺松嶋寺といふ

仁明帝承和五年をめぐりて此寺を建るといふは此寺

を嘉祥山延福寺と称して天台宗なり其後最明寺入道

時頼鎌倉の御執は所より来り法心上人なりて天台を改め

て禪宗とて法心を開祖とて松嶋山圓福寺と称す

そより大覚覺雄智覺覺満明極などいふ唐僧来り

る位持の九十一世義山和尚に到りて鎌倉建長寺の孤也

なり九十二世実堂宗中和尚より妙心寺派となすり慶

長十年一説は九年 貞山公再び造営しぬひ同十年落成

永く伊達家の宗廟とて寛永十三年 義山公先君

乃遺命によりて雲居和尚を請待し中興関山とて改

て瑞岩圓福寺と称し承和五年戊午より文政三年

一説に時邪入道旅僧の密となりて行脚して松嶋に
来り給ひし頃五大堂を舞臺ありて能興行ありし
戎時頼も多く乃人にまだまきく見抱ひぬひしが時
の役者此つゝなきまや時邪おもひびを声高く笑ひま
しを僧徒怒りて時頼を打擲などせしやかりぬ
いひこむく其処戎逃去り無相窟にかくれ一宿
志ぬひ鎌倉に歸りて故天台僧を追放し法心上人
を関山とて臨滄宗を改め松嶋山圓福寺と名ば
くとひふ○按むるに又一説に松嶋を天台の関基を

淳和天皇の御時天長五年坂本山王を松嶋
に移し慈覚大師戎別當とて三千坊十萬石の法
寄附ありし時を青竜山圓福寺と云 龜山天皇
の御時文永年中に至りて松嶋山圓福寺といふと
ひるま未審○法心上人俗名真壁平四郎僧と成
宋の時に入唐し徑山寺の無準と名する僧に從て法
を受け歸國して後法をひりけり委したる事
元亨釋書東國高僧傳等に見えたり偈あり遠入
徑山風月歸閑圓福木道場法心透得無一物
元是真壁平四郎又新後撰に元仙上人の和歌とて

蓮性法師松崎へまうでく法門など談じて取りける
はうりける本た夜の園路は迷ふ身なりとも眠る
たむ忍哉尋ねん○雲居和尚も坐振津次勝尾
山に住せり 先太守の招にまうて松嶋に来まうり或
人の傳へし相浴よ云居和尚瑞岩奪みありて夜ごと
は雄嶋の座禪堂へ通ひて觀念を修し夜ふけり帰
けるがあはし人和尚哉談んとも最暗き夜をえりびて
道の傍乃松れ木にのびりて和尚れ取る哉まちて木の
上より手を出しその首を攫るに和尚立ちまうり
て少しも動くは志づし時昼もそのはうりありし

うばそれ人あれまう手哉えなましに和尚も常の如
く寺へ取りぬそ後禪居て和尚と相浴のはらぐに
ちづぬるや夜ふけり淋しれ及をばるく通ひま
亥年月久しりれたあやもころも右つらんなど云
しに更なるしと答へけるあるもの己がなせるもの
ふはあのおしにそまうらなくとほくみ問ひすや
ふ和尚答ふしふや或夜志うく乃事ありて久
く立ち居るが時ははちどそのまうりかよ
なるや覺てまは必若た人なやけらつづき亥なる
へしと言しと我

時に古きをかけし其字體さほぐにうごころあり
 尋常なるに見ゆるかに世の人こそは賞美ま
 ○朝鮮梅 瑞岩すれ庭上よ二株の林あり一は紅花
 一は白花なり其花重瓣にしく中よある葉の外に葩
 の間おとに又少しつゝの葉あり香氣も殊にすぐきなり
 実々三つ四つ又々又つ六つも同じ葉には交て尋常の
 梅子よりハ小く一年よなりて十餘も結ぶ事ありさきせ
 老樹なほあよや年経るに後て実で結ぶ事少くなる
 とい 貞山公朝鮮よこころぬひし時種をほく爰に
 栽させぬと云 秘傳花鏡といふ書なほある品字梅駕

八つ房の梅



鶯梅などいふ種類あるべし品字梅を日本にもありて
そむそ香そ実そ形奇なるかに 後水尾帝花香実
といふ號を後ふこたて

○法身窟 無相窟ともいふ瑞岩寺中にある窟也
竪四間或尺横四間或尺五寸あり最明寺入道は窟に
宿して法心上人と改宗の事を約せりといふそのち
七八十年ほどさ嵯峨天龍寺夢窓國師の脚しては
此に至り天台止觀を講ざる哉睦ふといふ窟の上に
法身夢窓窟は五字の額あり

○經堂 瑞岩寺の内より先住通玄和尚建之といふ

○千佛堂 瑞岩寺の内より本尊木仏釈迦坐像
長或尺た太に千体なり仏像を四すつ雲居和尚建
立はといふ

○龍月院 ○護國院 ○寶珠庵 ○圓月庵 ○大光庵

○聯芳菴 ○法雲庵 以上瑞岩寺左の
旁に列す

○萬松菴 ○江月庵 ○音松庵 ○傳曲菴 ○紹隆庵

○得住菴 以上瑞岩寺太に
旁に列す

右十三ヶ菴瑞岩寺乃塔頭なり

○法雲庵の庭上に石二つあり一は長五尺幅壹尺五寸
一は三角形三尺ぬどづへる昔唐僧覺滿禪師此庵

に住せしよわは時僧徒を集めけ二ツの石へ水を汲ふ
させぬふ事頻ありけれ何れぞと問ふ唐土徑山寺
母火災有り我水の印を呪しよまきを救ふありと
水を灌地てやま夜晩景に至て終りぬその後一二年を徑
て徑山寺より禅師に書簡を贈て其功を謝し禮
物と鈴を贈るこきを火鈴と名はけて今瑞岩寺
よあり

○大光菴の玄関に溪泊は二字伐書くる扁額あり瑞
岩寺先住唐僧明極和尚の筆なりは庵を松崎す天台
乃時より河をく古刹寺あり昔々當村の内大光山といふ

山にありしを再興の時よ々乃此に移せりとぞ

○觀瀾亭 月又崎といふ所あり 太守の清茶

屋あり 負山公 豊臣太閤より伏見法殿を拜受志

なして此所に移し立ふといふ柱を移梅乃四方面

也 案内記は唐木四ツ 雨奇暗好四字の額 先太守御山公

の御筆觀瀾亭三字は額佐々木文山乃筆あり外圍

乃垣に細竹を網代と組りしを紐や四ツ打十二あり

といふ是伐貝玉垣と名づく尋常にありきり是亦伏見

法殿より移せばありし也 貝玉垣と玉垣は代るの妻也

梅さるに雨奇暗好の四字を宋の蘇軾の西湖の詩

に出る西湖の勝槩唐山にありて天下第一と唱ぬ
松崎乃風景も日本は阿比て第一と称はるれハ為遊
の秀句哉とらる此亭に名づけし最面白

西湖初晴復雨

獲軾

水光潋灩晴方好 山色空濛雨亦奇

若把西湖比西施 淡粧濃抹也相宜

○陽徳院 瑞岩寺の東北にあり 貞山公の夫人田村

太膳大夫清顕朝臣は法娘をここに葬てはるを立るとらふ

○獨鈷水 陽徳院の内にあり昔慈覚大師獨鈷を以て

土伐穿しれに清水湧出るとらふ今に大旱はも涸る

るなりとらる

梅むの天麟院の境内にも獨鈷水とりふありて
傳ふる所さきと同じとされども昔をその沙汰なけ
まば近頃の事とおもひる

○天童菴 瑞岩寺の東北にあり本尊十一面観音

木仏立像長き尺五寸日作陽徳院殿不持とらふ

佛といふ

○宮千代墳 天童菴の境内にあり高敷尺余めづり

九尺宮子代といふ童子を葬る所といふ昔此

ゆとりに宮千代といふ墓子あり容顔とらるを

才性柔和にして尋常よかきるなみ天より降臨
するの童子なりとく時の人これを天童と称すは庵
久しく住する所に菴哉も天童と名づけたりそ
見仏上人侍嶋よて日夜法華を讀誦しぬひ
宮千代聴受する子忽ら日哉怪て上人と同
讀誦せしが其声清らかに正しくきく人奇異
心ひをなせしが上人遷化の後童子も福なく身
ぬきてまは側に勸請なる鎮守山王の化身に
あらしんなど人といひけりとぞ

梅すはに封内名蹟志は宮城郡南目村宮城野

の戴拾四間東畑中に空地小塚あり里人これを見
墓と號ひ昔松嶋寺の見宮千代といふ者此野よて
死き里人憐れこきを埋る塚を築くそ後人乃
好むに塚の内にて夢あるをきく月夜夢
草葉よ宿のりとりみて嘆く也かくある事
久かりしが松嶋寺の徹翁といふ僧ありそ
ころそれ宮城母の原といひけきば後ら止
とぞ又ある人乃況に宮千代宮城母よ来りて和歌
の上乃句を得て下れ句哉ほぎ久くあべとぞ
らひ終る病とありて身はうぬ遺言にあらそ

なれ敷を宮城野に埋むとは二説に據まば宮子代
乃墓ハ宮城野あるを信とすべし又似たりとれども
皆俚俗に傳ふる所にして孰を是と定めざらん

○松嶋明神 今ハ松嶋より北の方高城とらふ駅の西
にあり紫明神とらふ昔々赤室の内蛇が寄こふ所
は河原が此處 貞山公の功臣山岡志摩守と云人
の賜ものる在所とらふ數代の後に故河原よりそ
家断絶志けまば蛇が寄居住此人民と那離散してはり
そは言城記に移りし者多うらうは本土の神祠
なきばとらふ松嶋より乞ひ受て今の處に祭はとらふ今

蛇が寄に梨木明神とらふあり即往古松嶋明神の有
跡なり

一説に々桂嶋にあはぬ神も即古の赤嶋明神なり
とらふも非なり

○御舟藏 太守の侍座船等數艘あり松嶋より高
城へ通路のたたに水主町とらふ數十軒ありて是を
時々船乗の替なり

○正海壇 正海壇が峯とらふ處にあり天台の僧正
とらふ人の墓なりとらふ高六尺周六丈ほどあり
今も里人も志る者なり

○護摩壇 山王山といふ所にあり高三尺ほど四方二尺
ふすちどぞ側の大なる窟に十二薬師を建立し
護摩修行ありしと云ふ

○法性院 竹の浦といふ処にあり○一華菴 松が

浦といふ所にあらず○地藏堂 一華菴の前あり

○五葉菴 檜園といふ處の山中にあり客殿に五葉

庵三字乃額あり黄檗木菴の筆を記

○雁金山 法崎の西南にあり二ツけ高た峯也雁乃

飛のふに似たるより名づくといふそ下の浦辺に出る処

を腕が崎といふ其形状人の腕に似たるより名づくといふ

一説に那房が松崎の轉びるなり又一説に某野が奇

の訛なりと

○あねとの山 松岩の西南にあり一規は朱鳥の訛也

昔仙人ありて赤たをを玩しと云ふ

○海無量寺 福聚山と称す松岩の内南にあつて

大沢といふ所の山乃半腹にあり瑞岩寺より十余丁

あり陸を山路に峻岨なり舟はくせりてはるの庭

あより海上の眺を富山小あつて富山と崎をま

くながめ此まを近く見る別に一景の勝地なり

○瑪瑙羅漢 寺中に瑪瑙にて作りし羅漢の小像

教^あ多^ちあり一つ毎^{ごと}にさほくの^{すく}の^あめ^くしてそ^と細^こ工^こ甚^た精^せ
妙^めなり昔^{むかし}唐^{たう}山^{さん}より船^{ふね}載^{のり}くるを瑞^{すい}岩^{がん}古^こ先^{せん}位^い勝^{しょう}雲^{うん}
和尚^{わうしやう}肥^い前^{ぜん}の長^{ちやう}崎^きにてほころとらふ

○羅漢樹^{らかんじゆ} 寺中^{てらちゆう}にあり俚^り俗^{じやく}こきを仏^{ぶつ}のなる木^きと云^い
皮^{かわ}も扁^{へん}柏^{はく}めぬ葉^はハ金^{きん}松^{しょう}葉^はに似^にたり冬^{ふゆ}を経^へるも

落^{おち}葉^はせびぞ実^み黄^{わう}赤^{せき}色^{しき}こころ俚^り形^{けい}に似^にたり故^{ゆゑ}に

羅漢樹^{らかんじゆ}と名^なづく唐^{たう}山^{さん}にてもさきを羅漢^{らかん}柏^{はく}とらふこの

木^き木^き曾^{そう}山^{さん}中にありいぬまた又^{また}くさまことらふ

○達磨堂^{だまどう} さまの上の山^{さん}の頂^{たか}にあり俚^り俗^{じやく}の傳^{でん}に達^{だつ}

磨^ま大師^{だいし}の所^{ところ}に坐^ざ禪^{ぜん}くわふとらふ熊^{くま}耳^{みみ}峯^{ほう}とらふ

古^こた額^{がく}あり々^々ハ寺中^{てらちゆう}に納^なむ達磨^{だつま}大師^{だいし}赤^{せき}衣^いれ木^き

像^{ざう}日本^{にっぽん}三^{さん}達磨^{だつま}と秘^ひき片^{ぺん}岡^{おか} 和^わ八^{はち}幡^{ばん} 城^{じやう}けとたぐ

三^{さん}體^{たい}ありとらふ

○葉山權現^{はつやまごんげん} 松崎^{まつさき}の内^{うち}庭^{てい}にありて慈^じ山^{さん}とらふ雲^{うん}

にあり真^ま山^{さん}氏^し勸^{くわん}請^{しん}とらふる年月^{ねんげつ}とさき似^に解^{かい}脱^{だつ}院^{いん}

とらふ額^{がく}あり

○葉山清水^{はつやましみず} 葉山^{はつやま}にあり水^{みづ}清^{きよ}冷^{ひや}よころ大^{だい}旱^{かん}にも

涸^くはるなりとらふ

○湯^ゆの原^{のら} 葉山^{はつやま}の邊^へに昔^{むかし}き温^{おん}泉^{せん}ありころが天^{てん}台^{だい}

改^{かい}宗^{そう}乃^の汲^くにふりころ冷^{れい}水^{すい}とたれりとらふ數^{かず}十年前^{じゅうねんぜん}

○八幡祠 五大堂鐘樓の側に小祠あり昔々當所
八幡崎といふ所に有るを寛永十七年十一月は家
子移されりといふ類聚國史畿外奉勅宮社の部
に 舒明天皇三年陸奥國宮城郡松嶋八幡奉勅
使 早良連惟保 時疫といふ此時疫癘流行すはにり
て 勅使をたてられりるるべしされば千二三百
年より以上の古社なり今に毎年七月廿一日祭式有
○五大堂 江に近たぬ小嶋二つあり堂をたてて五
大尊像を安置は大同二年坂上田村曆東夷征伐に
しり下りぬは建立するふは慶長五年 貞山公

刈田郡白石城を攻めし時夢の告あるにりて同九年冬
修覆造営等あり前にいへる鰐口に乾元元年正月十
日草壁入道勸進五郎為武運長久寄附之とあり大同
二年より文政三年庚辰まじり凡一千十五年乾元元年
より凡五百十九年

一説に田村曆の時毘沙門をかくに安置は五大堂の
慈覺大師の時に至りてこれ茂おくとは毘沙門を
飛本ぬひぬ今も唐那といふ所の奥毛岡村南光
院といふ修験の処にありとぞ
○御嶋 とも雄書といひり又小嶋ともいふ 景行帝

の法時日本武尊東夷征伐の時法時に舟をよせ
休息しぬふらう侍嶋と唱らしふ

一説に鳥羽院の法時見仏上人は地よ住しむ
く法力強く神物を役使せしむ事般ど夢し
めして内裏より佛像器物あつびに侍衣等賜
りしらう松嶋を侍嶋と唱ふらしふ一山の碑文
にもは説を用ゐらうとせきとらう以前の古
歌よも松嶋やをいほとせしむる夏多とれは侍嶋
の名ハ古事と見えし

○渡月橋 法嶋へこころ橋あり長十間余あり古乃

松嶋橋を是なるべし民部卿忠教のちに
そらもやうび家の後咲くる春いほれ橋

一説に古の松嶋橋と五大堂に在る橋是あり
とひふされどもいづきを證とまべた相なし今
何きの橋も近地ありに名をなし又松嶋ふ
名をなすらうるは外の古歌よも数多し

○稻荷祠 法嶋の橋乃あなといらう新法門稻荷と
名づく祈る者必冥験ありといふ

○松吟菴 法嶋薬師堂の側にあり一山の碑文よはる
妙覚庵の舊址よして又仏上人頼賢和尚などの居ら

きく處あり

○薬師堂

○碑 松吟菴の側にあり高九尺幅戴尺六寸元文元年丙辰七月瑞岩寺先住天嶺和尚の文なり天嶺の師通玄和尚は此に位せしが頽破にありてその三十三回忌の時に修覆再興せしをとりしるを書つゝ

○見佛堂 雄嶋にあり里人これを奥の院とよみ見仏上人法華六万部讀誦の道場なり

○坐禪堂 雄岩より圓滿國師こきを建把不住

軒四字の額あり

○頼賢碑 雄嶋の内西南の方のあり世の人を雄

鷲の碑といふ碑高壹丈戴尺臺石乃外き丈幅

三尺六寸五分より一尺三寸と厚七寸あり徳治三年丁

未の春觀鏡房頼賢といふ僧の弟子匡心孤運等そ

師頼賢の往けを傳んとく立ちるなり鎌倉建長寺

の住僧一山一寧の文并書なり草體を雜るのり

えりなる書あり文ハ甚むといふも典雅とさるに

たゞび一山を庵僧に鎌倉に位持せり昔この妙覺

庵に見仏上人住しぬひしが頼賢も亦は此に居る

に〜海山の靈氣を鍾めしるかにさ〜よ来るものま
らび悽愴として感我癸〜或も古を志めび今をい
〜又も父母祖先を慕ひ亡妻殤子我かま〜む貴賤
賢愚となく情あるものさ〜の志らるる感懐の
動くに従ひ昔を追ひ本を報るふあはるらび等
の言をなゆる愚民に何のさ〜あや〜とするに〜
び佛教に浸淫して無益の野為をなまき〜と事
天下溜〜と〜なまき〜あは〜は地よ何りてけ
るゆ〜あ〜さ〜

○學生嶋 ニつおあ〜び〜似〜るららぶ〜く〜い

あは嶋といひ一つさたま出るといふ

○屏風嶋 屏風をさてたるぬ〜なるららぶ〜

○福浦嶋 け嶋に竹多〜その外よのつねよふ
らざれども挿花筒に作りてあ〜ら〜るららぶ〜

好事の人或も茶杓を作り又も尺八如意等哉
製は又一種乃竹あり尋常にかさ〜ら〜中の空な

く木のぬ〜刀眼釘とさ〜ら〜利用とぬ又も枝を
ゆる箸をつくるけぬの名おなり松の名におも嶋〜
乃中に節志げた竹の緑に栄ゆるも〜こと〜にめ〜
たれ〜ぬ〜にぞ福浦嶋とも名づけ〜なるららぶ〜

○毒龍庵 福浦嶋にあり洞水和尚開基本尊不動木佛立像智證大師作弁菱所拈の仏と云傳ふ又弁菱の笈あひとりふ抱あり高三尺ぬど横き尺八寸秘上下二段にたのりく上段に小れ辨ぜん天并十六童子の木像何のまのぬと三寸ぬどづあり表を四面とも減めん金乃銅かねをほりて仏像又と雲氣等を彫ひ付たりそさほいらにも近代の抱かよハ何なんづと見えたり

○毒竜菴記碑 毒龍菴の側にあり享保十九年甲寅瑞岩寺天嶺和尚すゐんを建た碑文の大きハ此毒龍庵と洞あり和尚修行乃地なるが近交比荒廢

きるを修しゆ造落成しゆはにしりて 太守吉村公に請こて来臨あり席上せきじやうに画師周良しうりやうをめぐり洞ありの像を画えしめ又和哥一首わがをよみ風景を賞あしめ又は日に調伏壇てうふくだんの外う藪さかの中なかより曳出ひきだせしなといふるを書かつつねつりそ文艱あ澁せにく侍嶋しやうじま薬師堂の碑いしよりもよく難がし

○坐ざ禪石ぜんせき 毒竜庵のまにあり洞あり和尚坐ざ禪ぜんのふといふ坐ざ禪石ぜんせきの三字を彫ひ付けたり

○硯石 福浦嶋にあり長さ尺七寸横き尺七寸洞水和尚すゐん習石しゆせきといひ傳つふとよきものなれり

○調伏壇 福浦嶋にあり時頼入道松嶋寺改宗の時天台の僧徒さくは聚りて時頼を調伏しといふ今に熊野神をこゝみ祭まじり

○徳浦嶋 福浦嶋の東にあり

○經の嶋 福浦嶋の南にあり經塚といふあり古き尺又寸周八尺松嶋寺改宗乃時天台の経文を焼すく、塚を築く嶋に名も是にふまるといふ

一説に元仙上人法華六万部をかくに埋めるといふも非なり

○五重塔 經が嶋にあり高き丈戴尺五寸享保年中萬人戒供養とて天嶺和尚建之といふ

○翁嶋 昔松嶋寺天台宗の時五大堂の前以舞臺ありて能哉興行せしに翁の面体上をこえては嶋まづ飛来るかに翁嶋と名づくといふ五大堂より此嶋まで体上凡七八下ぬどもへちちたのそ面を瑞岩寺に何とていふ

一説案内記に昔天台乃時能興りて翁の面春日の作なりしが故ありて土に埋もせ夜中に光をばちちては嶋に飛来るよらて名はくせ

ひふ
○旭嶋 昔々比嶋に弁天祠ありしとらふらにそ
跡あり

右雄嶋より旭嶋までを松嶋の八嶋とひふ七浦
八崎八崎とらふら古よりいひ傳へり右の外も
名ある者たのめし

○毘沙門嶋 昔田村磨毘沙門の像を刻くその
五大堂の嶋に祭りぬひしを好慈覚大師五大
明玉を作りくそ側に安置しぬひしをばあは時毘
沙門光をたぬらるけ嶋に飛びさるぬひぬよりて嶋

の名といふ大黒嶋えびす者などりふ嶋の名もけ
毘沙門者乃類にふらる名づけしるこ又えしる

○千貫嶋 昔金賣橋次け嶋に澳しる一晝夜の名
に銭千貫文の利をばるより名づくといふ

○大黒嶋 ○夷嶋 ○小町嶋 といふあり ○いせ嶋 ○布
袋嶋 ○内裏嶋 ○すじめ者 ○あぶみ嶋 ○鞍掛嶋

○鎧嶋 ○あぶと嶋 ○牡丹もち嶋 ○小福浦嶋 ○九
の者 九つにそられく ○千部嶋 といふ中より三つ
て二つとあれり ○まなれ嶋

○阿嶋 ○このこ者 ○鳥羽嶋 ○鴻の巣嶋 ○堂が嶋
○繪嶋 ○般若嶋 ○燒嶋 ○雁あねしは ○塔が嶋

行人嶋 ○羅漢嶋 ○地彦嶋 ○大鼓嶋
 ○鐘ヶ崎嶋 ○折鳥帽子嶋 ○立木嶋 ○鍋嶋
 ○橋ヶ崎嶋 ○茶臼嶋 ○たや舟嶋 ○引通嶋
 屋形嶋 ○せいがん志波 ○唐櫃嶋 ○かご嶋
抵松宮村の内なるべし ○都嶋 ○筆拾嶋 ○硯嶋 ○化粧嶋
みつの小嶋 ○離嶋 神あり ○躰嶋 ○引嶋 ○在城嶋
 嶋 ○内裏嶋 ○右嶋 十二 ○蛇嶋 むらさき
 ○桂嶋 大なる者なり ○駒嶋 ○手代嶋 ○大言嶋
 ○小言嶋 ○沖續嶋 ○汀續嶋 ○佐久嶋 ○鐘志嶋
 ○舞子嶋 ○二王嶋 これら以上 ○月星嶋 ○松ヶ崎

○卯嶋 以上皆村 ○寒風澤 ○朴嶋 は二
村里多し皆 ○宮戸 こゝに大なる者なり ○えび嶋 ○竹ヶ崎嶋 ○舞嶋 ○あ嶋 ○百合嶋
 白當嶋 ○ま嶋 ○毛嶋 ○馬放嶋
監金宮の神を ○つら嶋 ○鞍嶋 ○免嶋 ○大放火嶋
 ○小放火嶋 ○小放島 ○帆た嶋 ○蛭子嶋 ○達
 摩嶋 ○材木嶋 以上皆村 ○高嶋 ○雀嶋 ○椶嶋
 ○權現嶋 ○なべ嶋 ○二嶋 ○東風嶋 ○西風嶋
 間風嶋 ○小黒嶋 ○大黒嶋 以上花洲村 ○犬嶋 ○亀
 嶋 ○つみ島 ○鏡嶋 あみ石 ○柿嶋 ○屋祓嶋

○うけ田嶋○はのき九の考○金剛嶋○薩陀嶋
八上村名
詳あり

右の考、大抵松嶋より塩釜まづ舟路二里の
間右にありあるを志るの數多きハ於遺漏も
あるべし又村名など多村ぶといはづぬる暇もな
けきばあろくに書志るにぬ必誤也や何ん

○松嶋八景

松嶋秋月 雄嶋夕暎 梅浦早春 霞浦飯雁
瑞巖曉鐘 竹浦夜雨 塩竈暮煙 江縣殘花
○古歌

至陸奥見松嶋又海中有奇嶋往昔日本武

尊至此嶋國首國民崇之言御嶋 上宮太子

松嶋哉御嶋者不見止日標方之月之都之外于尋者

和哥本紀下 上宮太子ハ即聖德太子の傳り也

家隆朝臣

秋の夜乃月やをくまのあはれなめくことた沖乃つり舟
あひらくる哉はけ松の木イノナギの若らう雲のたぬる海の釣糸

皇太后宮大夫俊成

立より又も来く見人松嶋をく海の音をばにあはれ那
木の若らうまう磯の音をばけ月乃氷の干もなくたより
昔より陸奥に哥枕多しといへる中にも松嶋ハ天

下才一の名勝なきが代々の集に載る古人乃
歌數多たがねにあくまゆらひ志といふ書のいふこと
詩に至りくもこゝ國風にあつざるゆゑにや古人
の賦詠多くてそ勝槩を敵にべれ佳作を更
になく唐土にくえの代乃詩人一絶句何り

薩天錫

風光招我海山阿 拍手吟魂奈句何
御嶋烟波松嶋月 到茲捲舌富樓那

相模川
田原坊

松嶋やそこまつははや木もさや

或云芭蕉翁は地に来りて風景を賞せしが詞
の及むざるを志りて終に一句をほひて
去らぬゆゑなる家以歸りて後を得たる句と
す

草よさを誰まのいぬそこのさつら

▲産物 ○福浦嶋の竹いへくま ○岩長生即巻拍

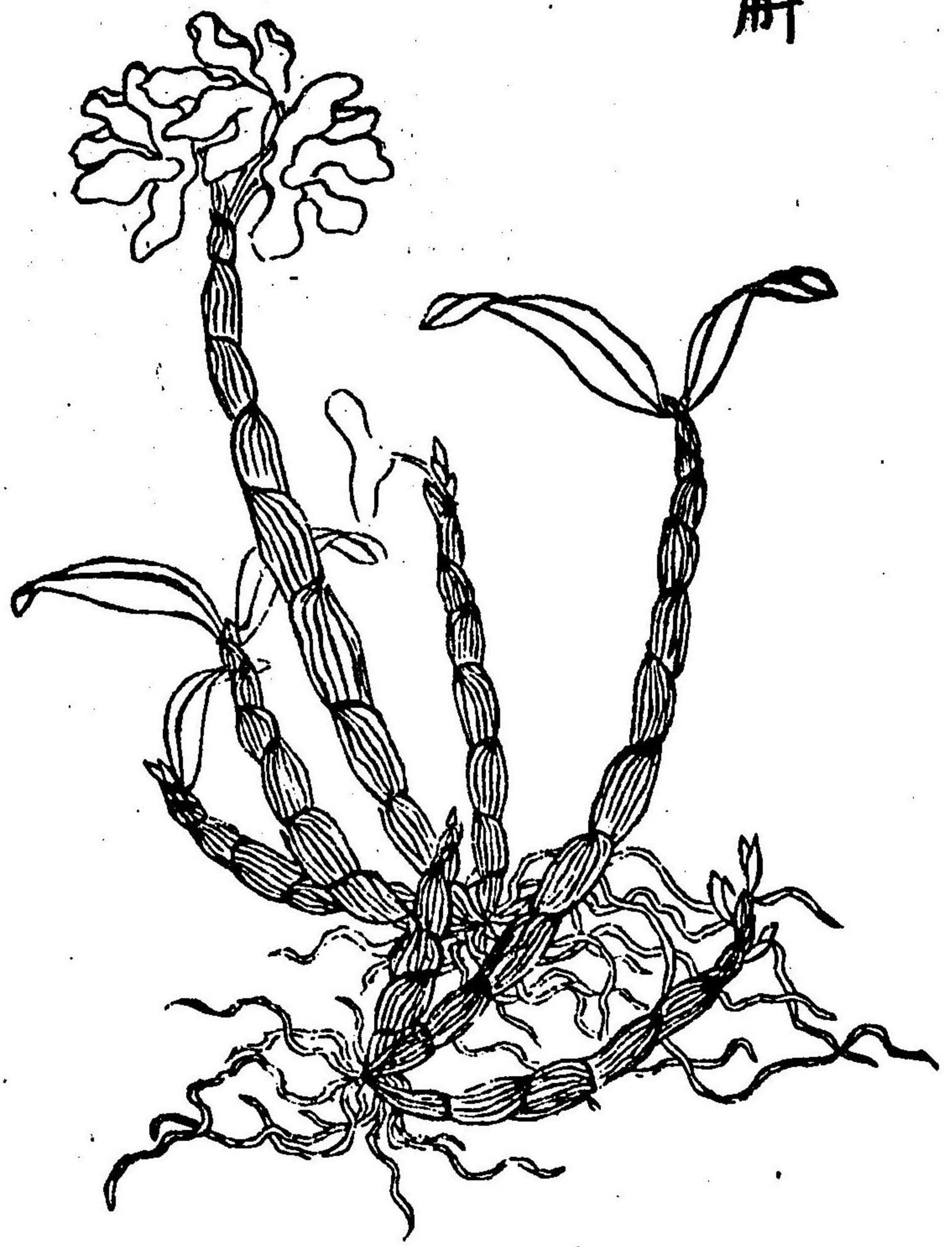
○石斛即瓦帚 ○雨漏草即法列骨碎

○寒ざら〜廉角菜 ○水飴 ○茶茺 ○紅蓮せん

るん 粳米を製〜扁く圓く〜満月の形に作り

火にあぶりて果子とる昔は村浪荒濱乃百姓掃部

石斛



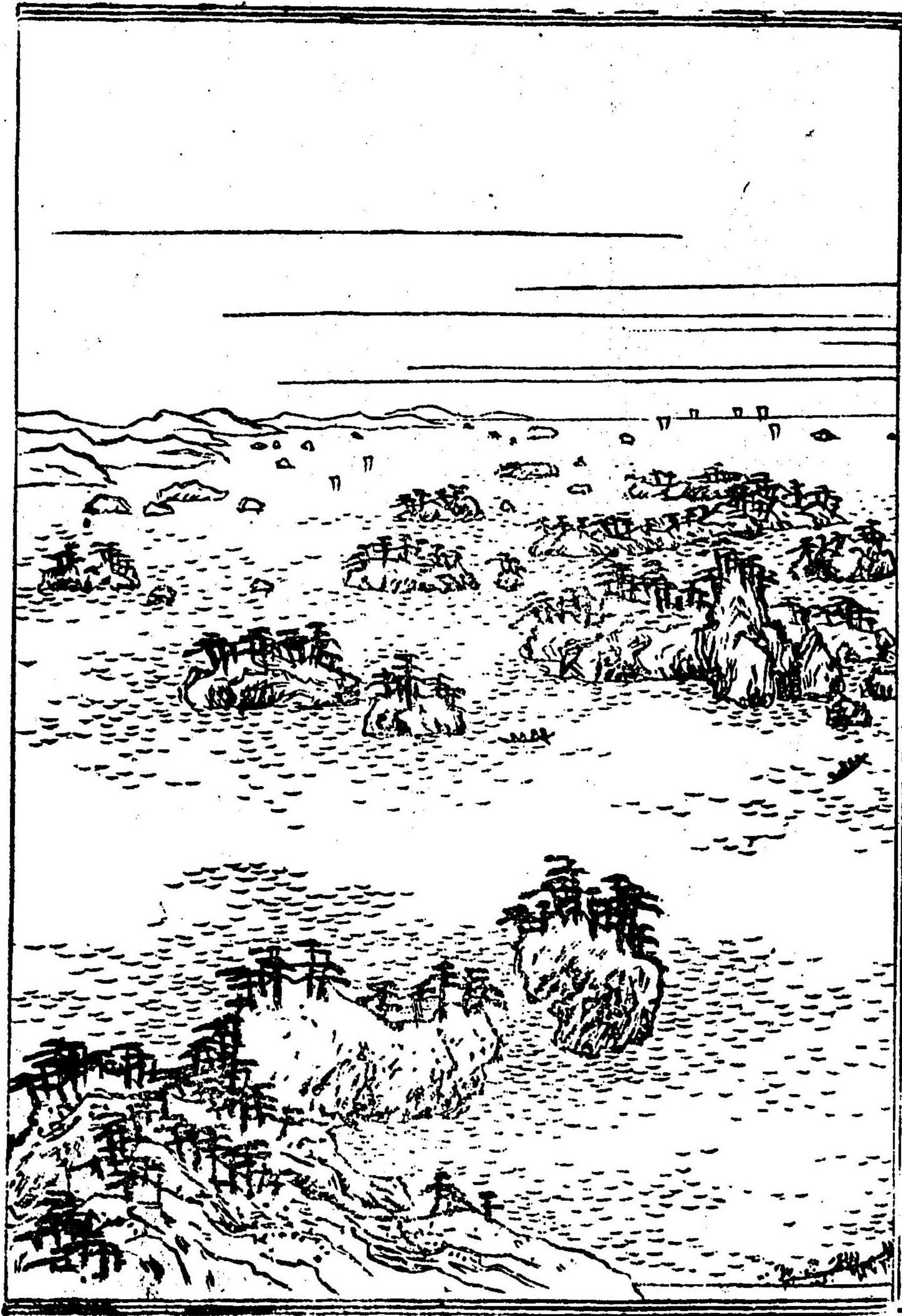
とひふ者の子小太郎といひて羽州象浮の人の娘を妻に約しそいまだ婚義とりのしる前に小太郎病よる死しけきばそ女けまのちたり剃髪し江蓮比丘尼と称し瑞岩寺の南に庵をむきびは果子をんとぬて賣るを紅蓮せんをいと名づく今心月菴とりふ寺にその住居せし跡ありとぞ果子を今も作りて賣るありは村の名おとい

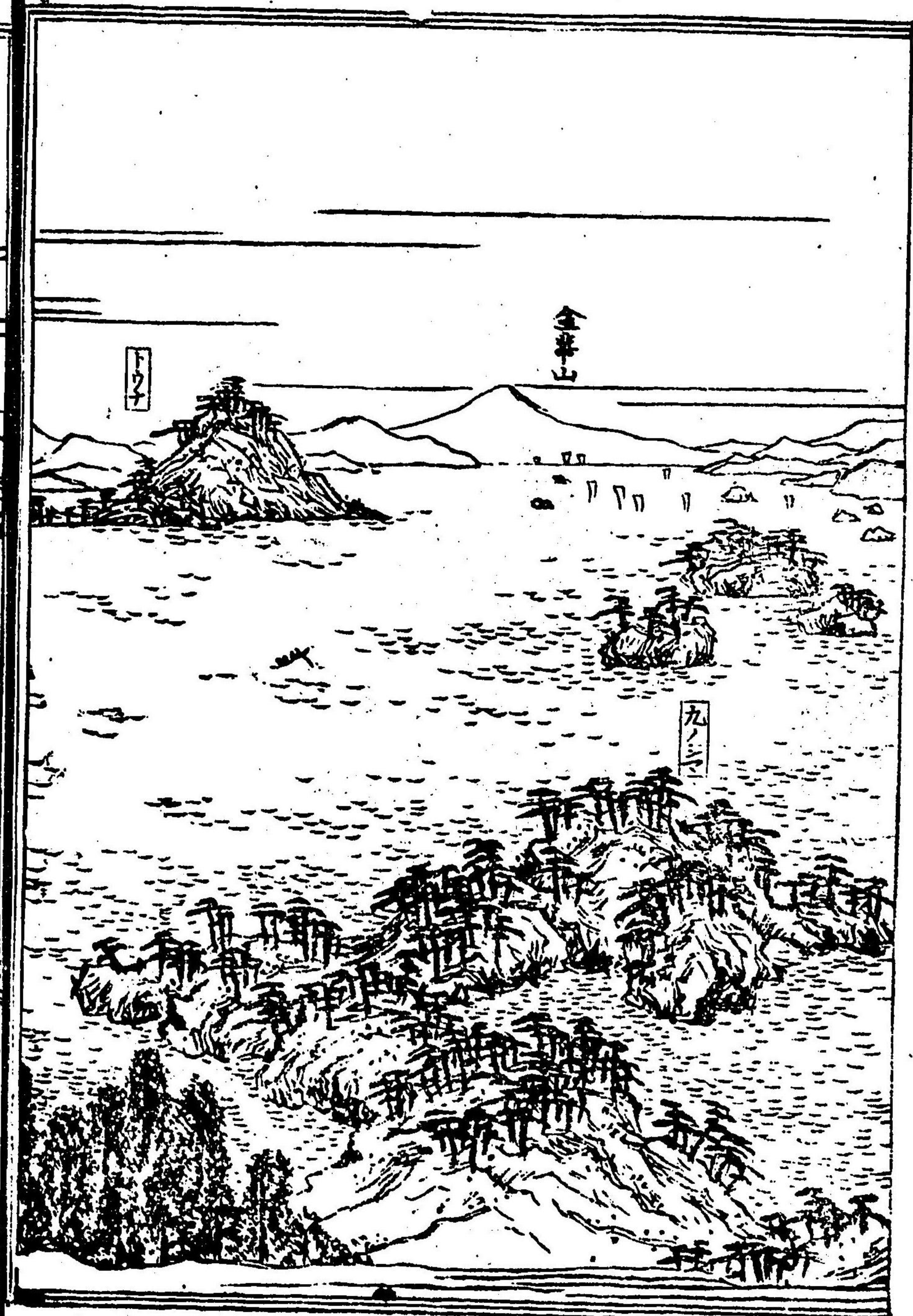
△路程 江戸より松崎まぎ丑の方九半九里○仙臺城下より丑寅の間六里半○千賀の塩竈

北の方戴里半^は陸^りとも^りに里^り數^り同^り遊^り空^りと必
舟^り路^りを^り通^りる^りべ^り奇^り觀^り多^り陸^り路^りも^りさ^りは^り嶮^り岨^り
多^りな^りく○利^り府^り驛^り仙^り基^り城^り下^りよりより丑^り寅^りの方^り戴^り
里^り半^り

松^り寄^りる^りより高^り城^り驛^りま^りぐ丑^りの方^り半^り里^り○同^り富^り山^りま^りで
寅^りの方^り戴^り里^り舟^り上^りの^り陸^り路^りを^りあ^りく○同^り金^り花^り山^りま^りで寅^り卯^り
乃^り間^り二^り十^り里^り舟^り上^りの^り日^り一^り里^り數^りを^りま^りど^り松^り寄^りる^りよりま^りぐと^りは^りに^りお^りく
穩^りあ^りる^り○同^り石^りの^り卷^りま^りぐ八^り里^り半^り

○富^り山^り 松^り崎^りの^り東^り北^り手^り檜^り村^りの^り内^りに^りあ^りり^り海^り岸^りに^り出^りて
高^りた^り山^りを^りり^り木^り立^り深^りく^りく^り畫^りと^りい^りど^りも^りぬ^りの^りく^りり^り
半^り腹^りに^り大^り仰^り寺^りと^りい^りふ^りと^りあ^りり^りそ^りの^り院^り中^りより^り眺^りを^りに^り
ま^りは^り松^り寄^りの^り海^り面^り庭^り上^りの^り泉^りの^りぬ^りく^り浮^りめ^りる^り鳥^りく^り
目^りの^り下^りに^りと^りち^りく^りく^り松^り乃^り緑^りを^り手^りに^り摘^りむ^りべ^りりと^りさ^りる^り
そ^り風^り景^り詞^りの^りた^りふ^りべ^りた^りに^りあ^りる^りぞ^りお^りに^り古^りより^り松^り嶋^りの^り
風^り景^りを^り富^り山^りに^りあ^りり^りと^りし^りぎ^りや^り余^り遠^り近^りの^り眺^りを^りハ^り東^り南^り
遙^りに^り大^り海^りの^り天^りと^り一^り色^りを^りな^りが^り父^り遠^りた^り右^りよ^りハ^り相^り
馬^りの^り諸^り山^りより^り近^りき^り唐^り那^りの^り二^りツ^り森^りま^りく^り數^り百^り里^りの^り程^り
お^りつ^りた^りた^りに^り遠^りた^りも^り金^り花^り山^りち^りう^りた^りち^り日^り和^り山^りに^りい^りる^り





まぐ皆足をあげてふむべしとおもはる又漢舟のり
のふと落葉の流るるがく塩屋のけりり風にな
びたる雲とものいたぬびくさはいらんうこな

○大仰寺 寛文中瑞岩寺洞水和尚開基瑞岩
の未寺臨濟宗なりはさのを上乃眺望せにまきなる
奇絶上の述るがぬ

○富山観音 山の頂上にある大同年中田村磨建
立のふ奥の三観音の一といふ牧山 麓側は田村
將軍の像あり馬のり甲冑を帯せり俚俗の傳は
田村乃軍大竹丸といふ鬼を退治しひは雲の骨
をうつめく堂をたぐるふといふ

右富山より手樽村の内は松峯の地にあり松
島の山上の眺を松嶋を一瞬に又ねろく昔より
松峯の景富山にありといひあるはせむにありて聊
かくに附記を

文政三年庚辰四月

仙臺

鼓 击子 述
東 澤 圖

松嶋圖誌 終

文政四辛巳年七月出版
明治二十一年七月三日印刷
明治二十一年八月廿五日再版

定價金拾八錢

著作者 故 櫻田周輔

發行者 宮城縣平民 白木曆

印刷兼 全 伊勢屋半右衛門
發兌者 全



023549-000-0

291.23-Sa544m(2)

松島図誌

桜田 周輔 / 著

M21

ADC-0526



291.23

Sa544m

